

二〇二〇年度

帰国生入学試験

【基礎学力検査】

「国語」問題

1. 問題および解答用紙は試験開始の合図があるまで開かないでください。
2. 解答はすべて解答用紙の所定の欄に記入してください。
3. 受験番号および氏名は解答用紙の所定の欄に記入してください。
4. 試験終了後、解答用紙を問題の上にふせて置いてください。
5. 回収するのは解答用紙だけです。問題は持ち帰ってください。
6. 「国語」の問題は1ページから6ページまでです。

1

次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

敬語⁽¹⁾というと、尊敬語と謙譲語を中心とした動詞の活用の問題と見なされがちです。

しかし、敬語は動詞にだけ現れるわけではありませんし、敬語の形式を使った場合でもその組み合わせによって敬意の程度がかなり変わります。

「悪いけど、俺の代わりに行ってよ」は、「すみませんが、僕の代わりに行ってもらえますか?」に直すのと、「たいへん恐縮なのですが、私の代わりに足を運んでいただけませんか?」に直すのとはずいぶん印象が違うわけです。

そこで、敬意に関わる表現対象を拡大した待遇表現研究、さらには、敬語を表現の形の問題ではなく、場面における話し手や聞き手のコミュニケーション行為としてとらえた待遇コミュニケーション研究が、国内では主流になってきています。

一方、海外に目を向けると、ブラウンとレビンソンのポライトネス理論⁽²⁾ (politeness theory)^(A) が有力な理論としてフキユウしています。

ポライトネスは、日本語の丁寧と似た意味を持った言葉ですが、大きく違う点が一つあります。それは、ポライトネスには友好性という意味が含まれている点です。つまり、ポライトに振る舞い、相手と良好な関係を保つためには、丁寧にするだけでなく、親しさを示す必要があるということです。

ポライトネスには二つの側面があります。

一つは相手との距離を縮め、積極的に相手に関心を示す態度で、ポジティブ・ポライトネス (positive politeness) と呼ばれます。周囲の人に理解されたい、共感されたいという聞き手の欲求 (positive face) を満たそうとするもので、明るく前向きに相手と接し、ほめたり共感したりすることで相手に親愛の情を伝えようと努めます。

もう一つは相手との距離を取り、相手を尊重するという態度で、ネガティブ・ポライトネス (negative politeness) と呼ばれます。周囲の人に邪魔されたくない、私的な領域に踏み込まれたくないという聞き手の欲求 (negative face) を満たそうとするもので、押しつけや断定をさけるように間接的に控えめに表現し、相手にかかる負担をできるだけ小さくするように努めます。⁽³⁾ 敬語に典型的に見られる機能です。

この両者は、相手との摩擦をカイヒし、^(B) 良好な関係を保とうとする目的では一致するのですが、その方略は反対です。

たとえば、高校や大学で初めてクラスメートに会ったときのことを思い出してみましよう。知り合いはほとんどいない状況のなかで親しい友人を作らなければなりません。最初は丁寧体、すなわち「です」「ます」体で周囲の人に接します。そして、ある程度言葉を交わし、相手との社会的距離が縮まってきた頃合いを見計らって、普通体、すなわち

「だ」「する」体に徐々に移行するのではないでしょうか。

最初から「だ」「する」体で接する人もいます。そうした人はオープンな性格で、相手との距離が近いほうが好ましいと感じるため、ポジティブ・ポライトネスを重視します。

一方、五月、六月になっても「です」「ます」体で接する人もいます。そうした人は人間関係にシ^(c)ンチヨウな人で、自分のプライバシーに踏みこまれないほうが心地よく感じるため、ネガティブ・ポライトネスを重視するわけです。

ポジティブ・ポライトネスとネガティブ・ポライトネスは、いわば「なれなれしい」と「よそよそしい」の対立です。行きすぎたポジティブ・ポライトネスは、聞き手の目になれなれしく映り、行きすぎたネガティブ・ポライトネスはよそよそしく映ります。適度な距離が好ましいわけですが、それはその人の性格によって、また状況によって異なります。

このように、敬語は、距離を遠ざけることによって敬うという方向性と、距離を近づけることによって親しみを表すという方向性があり、敬語を距離の表現と捉えることで、一貫した説明が可能になります。

ところが、従来の敬語論では、もっぱら相手を高める敬意という方向性の議論が中心でした。それによって、⁽⁴⁾見えるべきものが見えなくなってきたわけです。

敬語の難しさの本質は、尊敬語・謙譲語といった形の難しさよりも、聞き手との心理的な距離の取り方の難しさに由来します。敬語に見られるそうした心理的な距離のありようは、社会言語学的にはポライトネス理論によって分析することが可能です。

(石黒圭『日本語は「空気」が決める』より)

問1 ———線部(A)～(C)のカタカナを漢字に改めなさい。

問2 ———線部(1)「敬語」というと、尊敬語と謙讓語を中心とした動詞の活用の問題と見なされがち」とありますが、これについて、次の(i)(ii)に答えなさい。

(i) 次の……線部が尊敬語なら(A)を、謙讓語なら(i)を、どちらでもなければ(ウ)の記号で答えなさい。

- ① 社長室にうかがいますので、お待ちください。
- ② 先生からいただいた手紙をずっと大切にしている。
- ③ こちらに休憩室がございませう。
- ④ 私はお客様がなさりたいことをお手伝いします。
- ⑤ 母がお礼をしたいと申しています。

(ii) 「見なされがち」とありますが、敬語が「尊敬語と謙讓語を中心とした動詞の活用の問題」と「見なされる」ことよって、どのような不都合が生じるか、次のように説明しました。Iには本文から適当な語句を抜き出し、IIには最も適当なものを後の〈語群〉から選び、記号で答えなさい。

「すみませんが、僕の代わりに行ってもらえますか？」と言うのと、「たいへん恐縮なのですが、私の代わりに足を運んでいただけませんか？」と言うのでは、後者の表現の形の方が話し手の聞き手に対するI(五字)が高いと判断され、そこにあるはずの話し手と聞き手とのIIの関係性が無視される、という不都合が生じる。

〈語群〉

ア 懇意 イ 畏敬 ウ 軽侮 エ 親疎

問3 ———線部(2)「ポライトネス理論」は、従来の敬語の捉え方とどのようなことが異なりますか。十四字で抜き出しなさい。

問4 ———線部(3)「敬語に典型的に見られる機能」とはどのような機能ですか。最も適

当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 相手との相違を嫌い、間隔を取り除く機能
- イ 相手との関係を考慮し、間合いを取る機能
- ウ 相手との格差を吟味し、距離をつめる機能
- エ 相手とのつながりを絶ち、領域を犯さない機能

問5 ———線部(4)「見えるべきものが見えなくなってきた」とありますが、「見えるべき

もの」とはどのようなことですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 敬語の使用は丁寧な言葉遣いによって場の雰囲気であらたまったものにするだけではなく、相手との間柄を他者に類推させる根拠となること
- イ 敬語の使用は相手の地位を高めて尊重する気持ちを表すだけではなく、話し手がなれなれしい性格か、よそよそしい性格かを判断する材料ともなること
- ウ 敬語の使用は相手との上下関係から生じる敬意を表すだけではなく、相手との距離を適切に保つことによって友好的関係を築こうとする意志が働いていること
- エ 敬語の使用は相手の親しくしたいか親しくしたくないかの欲求にこたえるだけではなく、無意識に聞き手との距離を遠ざけようとする話し手の意識が出来ること
- オ 敬語の使用は相手を敬い、自分は控えめにしようという謙遜けんそんの気持ちを表すだけではなく、プライベートな領域に入り込むことに躊躇ちゅうちよする気持ちが含まれていること

2

次の文章を①～③の条件にしたがって、八十字以上百字以内で要約しなさい。

- ① 三文で要約すること
- ② 第二文の書き出しを「しかし」、第三文の書き出しを「つまり」で始めること
(……………。しかし……………。つまり……………)。
- ③ 解答欄の一マス目から書き始め、句読点も一字に数えること

「社会人」という言葉がある。普通、小学生や中学生が「社会人」を名乗ることはないし、そう呼ばれることもない。「社会人」とは社会に出て働く人を指し、また、そのような人が「大人」であるとも言われる。社会に出る、ということは、大人になることであり、学齢期に（主に学校で）知識や社会性を身につけることで、子どもは「社会人」たる大人へと成長していく。すなわち、子どもは社会に出るために学び、大人は社会で働く、というのが世の常識となっているのだ。

とはいえ、これは人類普遍の構図であるかと言えばそうではない。現在でも世界各地に点在する狩猟民族は学校教育とは無縁に暮らしている。そうした人たちは、子どもの頃から親の手伝いを通じて彼らの社会に参画している。狩猟の手伝いをしたり、煮炊きを手伝ったりしている子どもたちは、「社会人」と言って差し支えないだろう。

日本もまた同様で、明治五年の学制発布に至るまでは、日本中の全ての子どもたちが一人も漏らさず学校に通う、などとは考えられていなかった。それまで、弟妹の面倒を見たり、畑の草取りをしたりしていた家の子どもたちが義務教育を受けるということは、そうした役割を負っていた子どもたちを「学校に奪われてしまう」ことに等しかった。つまり、明治以前の日本では、子どももまた「小さな大人」として、大人の社会と関わりを持っていたのである。

これらの事例からも分かるように、前近代的な暮らしの中では、「社会」は大人だけのものではなかったし、子どもと社会の関係も一様ではなかったのである。

一方、今日の社会においては、そこに学校教育が存在する以上、子どもたちは等しく無償で初等教育を受ける権利がある、というのが重要な原則となっている。義務教育とは、「子どもは学校に通う義務がある」ということではなく、「親や保護者が子どもを学校に通わせる義務」のことである。また同時に、子どもたちは社会の労働力として搾取されるならないし、また強制的な労働からは解放されなければならない、ということも常識となっている。こうした「社会で働く大人／学校で学ぶ子ども」という構図や、現代の「子ども」観は近代社会によって作られた、比較的新しい概念だということが分かる。

(本文は本校で作成した)

(以下余白)

100	80	60	40	20

(下書き欄2)

100	80	60	40	20

(下書き欄1)

